

2026/03/27

～本庄早稲田で越境学習～

第4回「本庄早稲田会議」

開催レポート

About

■ 開催日時

2026年3月27日(金) 午後2時～4時45分

■ 開催場所

早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンター
レクチャールーム1および環境情報ギャラリー

■ 参加者

69名(28団体・35部署)



実施概要

本庄市、本庄早稲田の杜地域では、様々な企業や団体がそれぞれの目標に向かって活動している。この「奇跡」に感謝しながら、業種を超えた交流や多様性に触れる学びの場を創出し、地域企業・団体のネットワーク形成や新たな産業・プロジェクトの発展を目指して越境学習会「本庄早稲田会議」を開催する。

スケジュール

| | | |
|-------|--|---|
| 14:00 | 開会挨拶・趣旨説明 3F レクチャールーム1 | 司会 本庄早稲田国際リサーチパーク 田中 挨拶 早稲田大学本庄プロジェクト推進室課長 田中 健大氏 |
| 14:05 | 市内公共交通について | 本庄市都市計画課 山田 修氏 |
| 14:25 | 次世代モビリティに関する研究開発の現状と展望～本庄早稲田におけるこれまでとこれから～ | 早稲田大学理工学術院 大学院 環境・エネルギー研究科 教授 小野田 弘士氏 |
| 15:05 | 質疑 | 司会 本庄早稲田国際リサーチパーク 田中 座長 早稲田大学本庄プロジェクト推進室課長 田中 健大氏 |
| 15:25 | 閉会 交流会ご案内 | |
| 15:30 | 本庄早稲田会議交流会 2F 環境情報ギャラリー | 挨拶 本庄早稲田国際リサーチパーク専務 山下部 乾杯 早稲田大学理工学術院 大学院 環境・エネルギー研究科 教授 小野田 弘士氏 |
| 16:45 | 閉会 | 挨拶 本庄早稲田国際リサーチパーク事務局長 今井 |



第4回のテーマ 「地域交通」

テーマ策定の経緯

過去回で、本庄駅と本庄早稲田駅が離れていることや、地域交通の利便性の向上には課題を感じている参加者が多かったことから、「本庄市の公共交通の現状」を学び、踏まえ、本庄市では2000年代初めより学術的知見を提供いただく早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科から、小野田教授に講義をお願いし「聞いて、考え、明日につなげる」企画とした。

本庄市都市計画課 山田 修 氏

本庄市の公共交通をめぐる状況は、利用の広がりとともに新たな課題が浮かび上がっている。予約が取りづらくなった背景には、地域の移動需要が確実に増えていることがある。小型車両で運行するはにぽんシャトルも、乗車人数の制約から見直しが必要になりつつあり、車両の大型化やルート再編が検討されている。

一方で、回数券のデジタル化や将来的なMaaS導入など、移動を支える仕組みも変化の時を迎えている。運賃収入だけでは運行を維持できない現状から、広告導入など収支改善策も模索されている。さらに、シェアサイクルや電動キックボードといった新しい移動手段の可能性も探られ、地域の暮らしに合った交通の姿を問い直す動きが続く。

「一人で移動できたことが誇らしかった」と語る高齢者の声は、移動の自由が生活の質を支えることを改めて示している。地域の足をどう守り、どう育てていくか。本庄市の公共交通は、今まさに転換点に立っている。

早稲田大学大学院 環境・エネルギー研究科 教授 小野田 弘士 氏

自動配送ロボットの実証が進む中、本庄市にも新たな可能性が見えてきた。

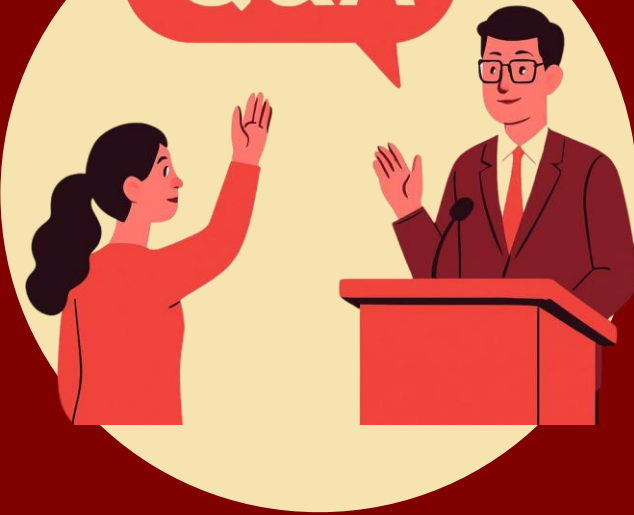
テーマパークでのゴミ回収や飲料運搬に使われるロボットは、すでに世界で採算性が確認され、国内でも企業敷地内でのテストが始まっている。公道での運用には時間を要する一方、広い商業施設やリサイクル工場など私有地での活用は現実的だ。

本庄市に求められるのは、こうした技術を地域の課題と結びつける“共有の仕組み”づくりである。市内企業や大学が持つアセットを持ち寄り、移動手段や物流を小さく試す場をつくるのが、次の一步を生む。新しいモビリティを地域でどう使いこなすか——本庄市はその実践の舞台になり得る。

本庄早稲田会議



Q&A



質疑

会場での質疑と、質問用紙にお寄せいただいた質問に講師より回答をいただきまとめました。

| | | |
|---|------------------------|---|
| 1 | 誰を優先する交通政策が地域活性化につながるか | <ul style="list-style-type: none"> 本庄市のはにぼんシャトルは「公共交通」として特定層に限定しない運行 他自治体には高齢者限定のデマンド交通もあるが本庄市は普遍的サービス 商店街側：歩行者増を歓迎しつつ、車流入の維持も商業に重要 行政：優先順位の明確な基準は未整備、都市計画と交通の一体検討が必要 |
| 2 | 商店街の交通とまちづくりの優先順位 | <ul style="list-style-type: none"> 大型店は「15分圏内人口」で出店判断 → 車中心の都市構造が前提 既存市街地の交通改善はハードルが高い 再開発などのタイミングで歩行者空間の拡大などを組み込む方が現実的 AIカメラ等で交通分析は可能だが、既存環境の大幅変更は困難 |
| 3 | 中型・中速配送ロボットが普及しない理由 | <ul style="list-style-type: none"> 国の補助制度が「導入側の持ち出し負担が大きい」 日本の安全基準・規制が厳しく、新技術導入に慎重 既存事業者(タクシー等)との調整が難しい ただし日本はタクシー料金が高く、ロボタクシーは収益化しやすい可能性 |
| 4 | 「どうぞ使ってください」では誰も使わない | <ul style="list-style-type: none"> 成功例： <ul style="list-style-type: none"> 強制的にでも乗ってもらう 特定の個人を一本釣りでも利用してもらう 高齢者は新技術に消極的 → 地域の巻き込み力が鍵 |
| 5 | 公共交通の課題と原因 | <ul style="list-style-type: none"> 課題は多岐にわたり、原因が複合的 はにぼんシャトル：予約が取りづらく、需要と供給のミスマッチの可能性 高齢化で需要増の可能性はあるが、交通手段の多様化も進む 供給増はコスト増 → 持続可能性の確保が課題 |
| 6 | 公共交通は「採算」で考えるべきか | <ul style="list-style-type: none"> 参加者意見：ゴミ収集が無料のように、公共交通も行政サービスとして考えるべき 小野田先生：既存交通に多額の補助、新規サービスにも別枠補助 → 資源配分の見直しが必要、地域交通は教育・福祉と同様、公共が負担すべき領域、コスト負担の設計は地域ごとにデザインすべき |
| 7 | AI・新技術による改善の可能性 | <ul style="list-style-type: none"> AIで需要予測・配車最適化 → 少ない台数でも効率運行が可能 無人配送ロボットなどと組み合わせれば、新しい移動サービスの形が生まれる可能性 |



| | | |
|----|----------------------|---|
| 8 | 本庄市の公共交通資源と課題把握について | <ul style="list-style-type: none"> 本庄市の公共交通は4種類 JR3駅(本庄・本庄早稲田・児玉)/民間路線バス/はにぽんシャトル(駅間シャトル)/はにぽん号(予約制デマンド) 課題は多岐にわたり、すべての原因を完全把握するのは困難 便利で快適な移動の実現に向け、継続的に改善に取り組む姿勢 |
| 9 | 車いす利用・停留所の基準について | <ul style="list-style-type: none"> はにぽんシャトルは車いす利用者の一定の利用が確認されている停留所の設置基準:病院・商店・自治会要望を踏まえ半径300m前後に1か所を目標停留所の新設・移設は随時実施し、市HP・広報・車内掲示で周知 |
| 10 | 「レンタサイクル・キックボードの要望者層 | <ul style="list-style-type: none"> 直近のアンケートは未実施 これまでの声としては、学生・サラリーマンからの要望が多い 今後、ニーズ把握を進め、必要に応じて施策を検討 |
| 11 | 実験しやすいエリアと必要な環境 | <ul style="list-style-type: none"> 本庄早稲田駅周辺(本庄早稲田の杜)は道幅・歩道・自転車レーンが整備され、実証に最適 課題:AI・IoT活用に必要な通信インフラが沿線で未整備 整備後は、利用者数・CO₂削減・店舗マップなどのデータを デジタルサイネージ・広報で公開し、地域の理解を促進 |
| 12 | ターゲット設定と利用目的の明確化 | <ul style="list-style-type: none"> 車社会のため、誰が・何のために使うかを明確にすることが重要 本庄早稲田～本庄駅の沿線には飲食店・コンビニが多く、「飲食店への移動」を主目的に設定すると導入しやすい 起点:駅利用者 → 本庄早稲田駅/車利用者 → パークライド型への転換を促す/飲食店マップや自動案内など、目的地誘導システムの構築も有効 |
| 13 | 駐車場との連携とメリット設計 | <ul style="list-style-type: none"> パークライド実現には駐車場確保が必須 近隣施設・民間事業者・公共施設と連携し、一定時間の駐車枠を確保 無償協力ではなく、事業者に具体的メリットを提示することが重要 来客増・購買促進 利用データの共有(経営活用) 「地域貢献企業」としてのブランド向上 |
| 14 | シェアリング運用と地域一体型サービス | <ul style="list-style-type: none"> 飲食店への往復利用が見込まれ、シェアリングが成立しやすい構造 飲食店へのポート設置、利用者向け割引など、地域全体での連携サービスが鍵 利用者が「地域ぐるみの取り組み」と実感できる仕組みづくりが重要 |
| 15 | 今後の展望 | <ul style="list-style-type: none"> スモールスタート → 課題把握 → 段階的拡大が成功のポイント 持続可能なモビリティ環境を整備し、地方都市の新しいモビリティモデルとして全国発信を目指す |



CAR SUN WAGON

キッチンカー(焼き餃子提供)
本庄早稲田モビリティ共創プロジェクトメン
バー 早稲田大学環境総合研究センター招
聘研究員/エムケー工業株式会社代表取締
役 三浦滝雄氏が運営



YUCA'S SECOND KITCHIN

代表 梅津 由佳 氏
東京都出身 創業スクール 第2期生
本庄市にて、オーガニック野菜を中心に添加物不使用
のお惣菜、お弁当を作っている。主にイベントにて販売
しており、不定期で店舗にて惣菜販売を行っている。



赤堀製菓専門学校

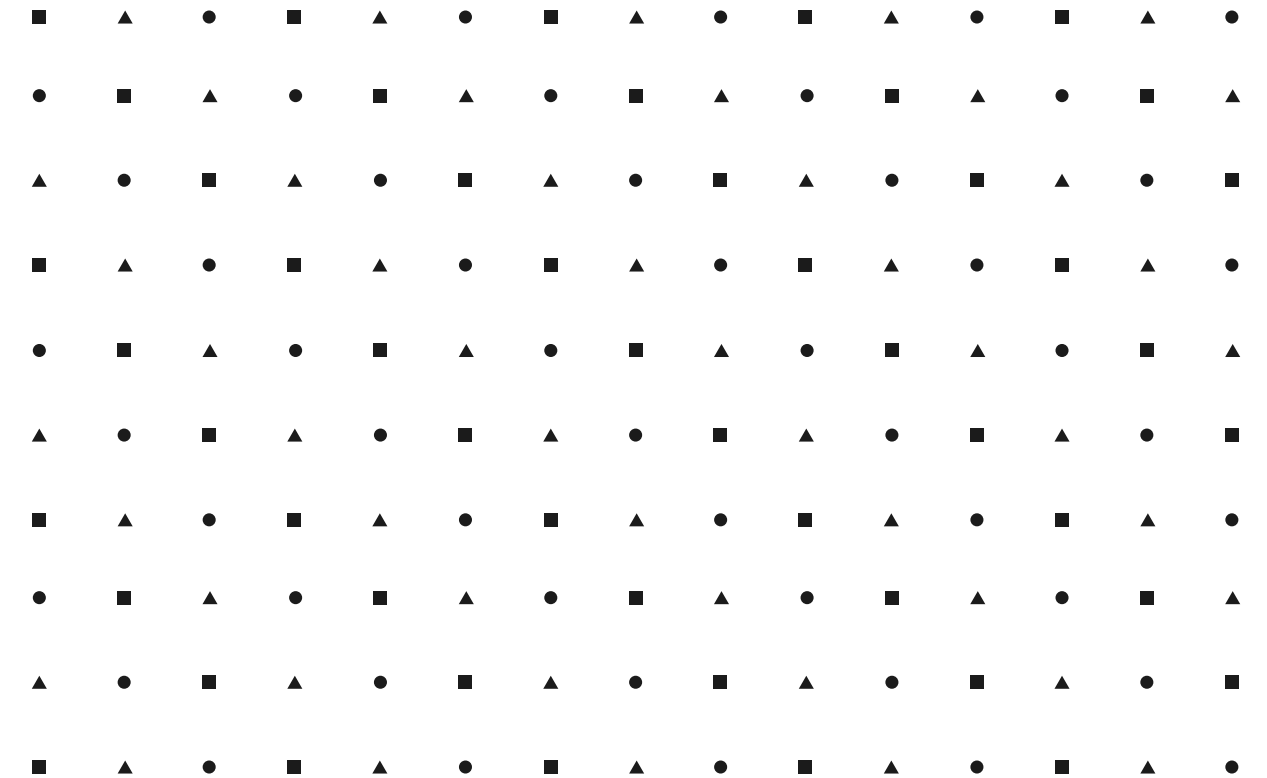
同校で講師を務める、和菓子職人 匹田順治氏による「あま
りん苺大福」、同氏は、本庄市出身 早稲田大学本庄高等学院
OB 菓子製造技能士1級(和菓子製造)ものづくりマイスター
チョコレートイノベーションコンテスト和菓子部門優勝など

あまりん生産者:五十嵐苺園(本庄市)
第3回クリスマスいちご選手権金賞受賞(日本野菜ソムリエ協
会主催R7.12.3)

交流会

地元業者提供の軽食を楽しみながら

立食形式で自由に軽食を囲み、参加者同士が気軽に交流できる、異業種交流
会を実施。軽食は、弊財団にゆかりのある市内事業者様にご協力いただき、
地域の魅力も感じられる温かな場となった。



本庄早稲田会議



本庄早稲田会議

本庄早稲田モビリティ共創プロジェクト協力による モビリティ試乗体験

会場外では、小野田氏が手掛ける次世代モビリティの試乗会も開催。多くの参加者が実際に乗車することで地域交通の未来像をより具体的に捉えることができ、講演内容との相乗効果で理解が深まる機会となった。
試乗後には小野田研究室所属の大学院生によるアンケートも実施した。

※本庄早稲田モビリティ共創プロジェクト: 地産地活モビリティの製造サプライチェーンの構築を目指し、早稲田大学と地域企業群が連携した枠組み(2021~)



次回の開催もお楽しみに！

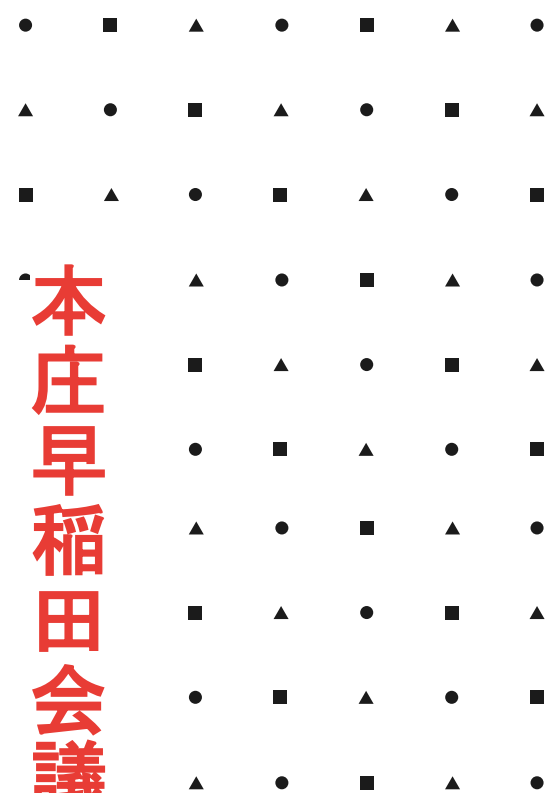
(公財)本庄早稲田国際リサーチパークでは、産学官連携においてネットワークの拠点となる、各種事業を展開しております。

本庄早稲田会議にご参加いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

普段交流のない他業種・他分野の方々と意見交換や学びを深める貴重な機会として、多くの参加者から高い評価をいただきました。以下にいただいたご意見を要約しました。

- ① 多様な視点・新しい知見に触れられた
 普段の業務では得られない視点に触れられた
 さまざまな立場の人の意見・体験が参考になった
 ビジネス・公共政策など幅広い視点が学べた
 知らない世界を知ることができた
- ② 本庄早稲田・地域の理解が深まった
 研究機関の取り組みや地域の発展について知れた
 本庄市の現状を踏まえて考える機会になった
 地域活性化のポイントを学べた
 本庄地域を良い環境にする活動だと感じた
- ③ 講演内容が充実していた
 研究室の取り組みが具体的に聞けた
 先進事例や次世代技術の説明が勉強になった
 行政・大学・民間の議論が有意義だった
 資料共有を希望する声もあり、内容への満足度が高い
- ④ 交流の場として価値があった
 外部の方、地域の方と交流できた
 普段関わらない人と話せてよかった
 大学生にとっても良い交流会
 モビリティ試乗会など体験型企画が好評

本庄早稲田会議



イベント参加レポート：第4回本庄早稲田会議

2026年3月27日、JR東日本・本庄早稲田駅近くの早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンターで開催された「第4回本庄早稲田会議」。今回のテーマは「地域交通」ということで、本庄市都市計画課課長補佐の山田修氏、早稲田大学理工学術院大学院環境・エネルギー研究科教授の小野田弘士氏をスピーカーにお招きして開催されました。今回も越境学習から新たな可能性が生まれていく現場をレポートにまとめました。

■ はにぼんが大活躍！ 本庄市の公共交通事情



2023年、本庄早稲田の新しいブランド創出を企図したワークショップからスタートした「本庄早稲田会議」も今回で4回目となりました（ちなみに、2回目は「防災」、3回目は「水資源」がテーマでした）。

4回目のテーマは「地域交通」と聞いて、私がすぐに思い浮かんだのは、上越新幹線の駅である「本庄早稲田駅」と在来線の「本庄駅」との距離です。ルートにもよりますが、早稲田大学本庄高等学院のサイトには「南口からタクシーで9分（1,200円程度）、徒歩30分」とあります。

車の利用者にとってはそこまで気にならない距離かもしれませんが、第1回目のワークショップでは2つの駅が離れていることに課題感をもつ参加者も多く、本庄地域を周遊してもらうために、「映えスポットマップをつくってはどうか」「スタンプラリーを開催してはどうか」「陸船車発祥の地と言われている本庄で陸船車レースを開催してはどうか」といったアイデアが生まれていました（そのアイデアは「隠れはにぼん追跡マップ（はにぼんを探せ!）」として結実しました）。

Report
1/3

本庄早稲田会議

実は私も街の探索を兼ねて両駅間を一度歩いたことがあり、土地勘がないのも影響して30分以上かかったと記憶しています。そのため、それ以降は両駅間を移動する際には、200円（大人料金）で乗れる「はにぽんシャトル」を利用しています。

本庄市ではシャトルバス以外にも「デマンド型の乗合バス」（はにぽん号）を運用しており、その「はにぽん号」が一人目のスピーカーの本庄市都市計画課課長補佐の山田修氏のメインテーマでした。

山田氏によると、利用者の約半数が70代以上とのことですが、小学生が塾のために乗車することもあると、利用者の4割が運転免許証を保有しているにもかかわらず活用しているというデータもあつたりと、幅広いニーズに応えている様子が伺えます。都市計画課には「今までは移動する際は家族に頼っていたが、一人で移動できることを実感し、自分を誇らしく感じた」という趣旨のメッセージも届いているそうです。

一方で、令和2025年に運行システムを入れ替え、リニューアルしたところ、利用者数は伸長した一方で、本庄地域の年間利用者が1万人弱に対して、児玉地域は2000人弱と低迷していること、さらには持続可能な運行のための最適な車両・ルートを選定、回数券のデジタル化、収支の改善等の課題が挙げられました。



編集者/ライター

池口 祥司氏



池口 祥司氏(いけぐち しょうじ)
1984年、山口県生まれ。早稲田大学法学部卒。2008年、株式会社PHP研究所入所。第一普及本部東京普及一部(書店営業)、企画部、特販普及部を経て、ビジネス出版部にて書籍の編集業務に従事。現在は、2018年に参画した天狼院書店の「取材ライティング・ゼミ」講師の他、フリーランスの編集・ライターとして書籍、雑誌、企業会報誌、ウェブメディアの編集・執筆に携わる。担当した書籍に『経営者になるためのノート』(柳井正著)、『大人はもっと遊びなさい』(成毛眞著、以上PHP研究所)などがある。

■本庄の街で自動配送ロボットが活躍する日も近い!?

二人目のスピーカーは、本レポートでは紹介しきれないほど、さまざまな地域でいくつもの活動を展開中の早稲田大学理工学術院大学院環境・エネルギー研究科教授の小野田弘士氏。「本庄スマートエネルギータウンプロジェクト」に参画するなど、本庄地域と縁の深い小野田氏は、2025年には本庄市のエムケー工業の協力を得て、自動配送ロボットの社会実装に向けてテストを実施。公道を走らせるにはまだまだクリアすべきステップがあるとのことですが、ごみ収集への応用、フィジカルAIとの接続等を検討しているそうです。

お二人のスピーチが終わった後は、会場から多くの質問が飛び交い、「地域発展のために地域交通はどういった立場の人々を優先すべきか」「なぜ、日本では配送ロボット導入の気運が高まらないのか」「公共サービスに採算性は必要か」等々、議論は白熱。個人的に印象に残ったのは、サーキュラーエコノミーを理解するために考案された「ビジョン・メゾ・シーズ (VMS) モデル」を例に、「日本はビジョンとシーズはあっても、『誰が推進するか』といったメゾの部分がないか」と指摘した小野田氏の問いかけです。

本庄早稲田会議終了後の懇親会では、本庄市のYUCA'S SECOND KITCHEN (代表・梅津由佳氏) のオードブル、本庄市出身の匹田順治氏 (赤堀製菓専門学校教務部) による「あまりん苺大福」(本庄市の五十嵐苺園の五十嵐淳氏が育てた「あまりん」を使用)、焼き餃子 (キッチンカー) などが振る舞われました。また、会場内ではエムケー工業とインキュベーション・オン・キャンパス (IOC) 本庄早稲田に入居する「電知」とが共同開発したリチウム電池の発火を防ぐボックス「DENPOI」が展示され、会場の外には小野田氏が手掛けるモビリティの試乗会も開催されるなか、異分野の参加者同士の交流が時間いっぱいまで続きました。

池口祥司 (編集者・ライター)

本庄早稲田会議



ご参加

35団体・部署名(順不同)

本庄早稲田会議

株式会社グローバルソフトウェア
エムケー工業株式会社
株式会社ランタ
日生工業株式会社
本庄ガス株式会社
株式会社電知
株式会社リード
株式会社椿本チエイン
本庄市議会
株式会社 ぐんま東庄
株式会社タイガーチヨダマテリアル
クラウドテン
活き活き職場づくり研究所
サイトウ経営企画室
株式会社東和銀行
クロマジヤパン株式会社
本庄銀座ブルワリー
株式会社カインズ
埼玉信用組合 本店
body & mind Gym Leun (ボディアンドマインドジム ルアン)
東京滋慶学園赤堀製菓専門学校
YUCA'S SECOND KITCHEN
フリーランス(編集)
太平ビルサービス株式会社
ヤマト運輸株式会社
早稲田大学理工学術院大学院環境・エネルギー研究科
早稲田大学総長室本庄プロジェクト推進室
本庄市企画課
本庄市環境推進課
本庄市都市計画課
本庄市生涯学習課
本庄市文化財保護課
本庄市市街地整備室
本庄市市民課
公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパーク